

金津奉行平本良充は、歴代の金津奉行の中でも名奉行として知られています。とりわけ北潟では、村の窮乏を救ってくれた恩人として敬慕し、良充が金津奉行から福井藩の側用人になり福井で居住するようになってからも、福井まで訪ねて、何事でも相談し助言を受けていたと云います。没後も、平本奉行への謝恩の思いは変わらず、遺徳を偲ぶ法要を行ってきました。

それでは、平本良充は、どのような事情で金津奉行になったのか。金津奉行はどのような役所なのか。平本良充の家柄や人柄はどのようなものであったのか。そして、平本奉行と北潟との関わりを、平本良充の没後まで順次たどることにします。

平本良充が金津奉行になった経緯は、福井藩最大の「明和の大一揆」にありました。

■明和5年の大一揆。明和2年(1756)、夏の出水による不作で、福井領内で9万石余りが収穫できなかったと幕府に届け出ています。明和3年は、福井城下で大火があり、侍家92軒、町家2678軒が焼失し、死者も17人でています。この年も凶作でしたが、村方に城下救援のための依頼金を命じています。

明和4年も凶作で米が不足して米価が急激に値上がりしました。三国では、廻船問屋で米穀商の尾張屋五郎兵衛家が打ち壊しにあっています。

明和5年2月、このように民衆が困窮している中で、福井藩主松平重富は、江戸からの帰国費用の調達のため5万5000両の才覚金(御用金)を課しました。これに反発した福井城下の困窮者が、3月22日に有力商人に救米を要求し、24日には村方の百姓が「ひだるい、ひだるい、まかないくれ(食べ物よこせ)」と藩御用達商人方へ押し寄せました。福井藩では初め、弾圧の体制を取り、一揆を指導した者を捕まえ牢に入れましたが、かえって反発を招き、29日には一揆勢は2万人にも達し、福井藩はやむなく東西の福井別院で一揆側の首脳と会談し、御用金の撤廃、年貢負担の軽減、入牢者の解放など要求の一切受け入れて、4月1日に福井城下での騒動が収まったのでした。

■平本良充が金津奉行に。しかし、4月3日、宮谷村・権世村・浜坂浦・北方浦の村人が、吉崎の豪商見谷屋に押しかけ、打ち壊すという騒動が起き、負傷者も多く出ました。この一揆の主な勢力は集落の大きい北潟の者たちでした。前年の三国での打ち壊しや、吉崎の見谷屋騒動も金津奉行の支配下の出来事です。金津奉行の奈良忠左衛門は「支配下の取り扱いよろしからず」と交替させられて、平本良充が金津奉行になったのです。

【肖像画の付記】平成14年10月、市村敬二氏の仲立ちにより、7代目の子孫に当たる平本孝氏から「肖像画」と「墓誌銘」の掛軸2幅が北潟公民館に寄贈された。



平本良充は、明和5年(1768)7月2日、第16代目の金津奉行として着任し、安永8年(1779)までの12年間を勤め、藩主の側用人の要職に栄転しています。

それでは金津奉行とは、どんな役所でしょうか。

■**金津奉行所の所在地。**奉行所は、旧北陸道が通る金津大橋の竹田川沿い、今の老人福祉センター市姫荘辺りにありました。屋敷は全体で1町2反余りの広さがあり、奉行が住む屋敷は、400坪あり、藩主を迎えることもあり「御茶屋」と呼んでいました。また別に、受込屋敷(下代3人の住居)が200坪と、奉行所の周囲に鉄砲組の長屋(1軒25坪)があり、善蓮寺の南隣に牢屋と牢番屋敷(370坪)がありました。

■**金津奉行の職務と組織。その支配地域。**平本良充金津奉行は、350石取りの上級武士の家柄でした。上級武士は福井藩全体で70人ほどいて、お城への登城や、その他の勤務で乗馬を許されています。

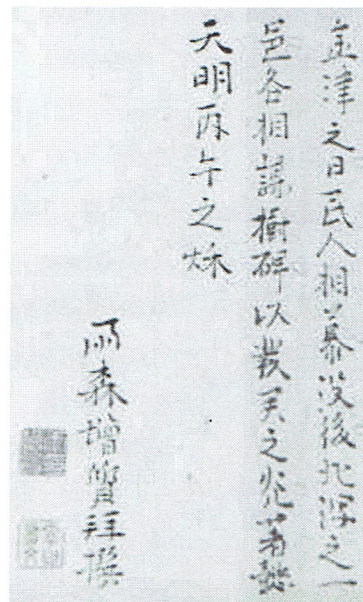
奉行の職務は、民政の要(下筋の押)として、下代3名、金津組(鉄砲組)20名をあずかり、金津町に常駐して、三国湊をはじめ川北領の一带を支配し、戸籍・訴訟及び軽犯罪をつかさどる、となっています。下代は、受込役、手代、書記の3人からなり、金津組は有事の際には鉄砲隊に編成されますが、普段は民政の末端の業務を分担する軽輩(足軽)武士です。この金津組は警察・消防の役割も兼ねていました。また、三国湊に2名が常駐し、山竹田・細呂木の口留番所(関所)、浜坂の口銭(船賃)番所に、それぞれ2名が常駐していました。

川北領は福井金津領ともよばれ、「九頭竜川以北」の地域で、現在の坂井郡・吉田郡にまたがる地域でした。ただ、丸岡藩や西尾領は含まれていないので、波松浦や赤尾村は金津奉行の配下ではありません。坂井郡60ヶ村、吉田郡30ヶ村の4万9000石余りが川北領になり、5万石の丸岡藩より1000石少ない領地になります。因みに金津町・三国湊を除くと、2400石の北潟浦が一番大きな村落でした。

■**平本奉行が、北潟を訪れたのは何故か。**前回で紹介したように、奈良金津奉行が免職になったのは、「支配下の取り扱いよろしくらず」でした。その直接的な要因は、吉崎の見谷屋の打ち壊し騒動にありました。この騒動の一揆側の主力になったのは北潟浦の人たちでした。だとすれば、何よりも北潟浦の実情を自分の目で確かめる必要があったからだと思います。明和の大一揆の展開を見れば解るように、多少の程度の差はあっても、川北領全体が疲弊していたから大一揆になり、見谷屋打ち壊しになったのです。

北潟だけが特別に窮乏していたという資料は見当たりません。

※写真は、平本良充の「墓誌銘の一部」で、雨森増質の直筆原文です。



平本奉行の人となりや、北潟村との関わりを示すものは、2つの碑文だけです。1つは平本良充の墓に添えて建てられた?、「墓碑銘」です。碑文は、福井藩の文人で有名な雨森増質が書いています。いま1つは、北潟の村人が良充の子息良郷(よしさと)に願い出て建つはずであった?、「恩爺(おんや)の碑」の碑文です。碑文は、金津に縁のある福井藩の医官で文人でもあった浅野文驥(ぶんき)が書きました。雨森、浅野の2人とも、良充と長い交友があり、良充をよく知る人物です。残念ながら、この2つの碑そのものは、現在見つかっていません。碑文(文章)が残されているだけです。

■「金臺平本良充之墓 墓碑銘」

良充の墓とその墓碑銘については、市村敬二氏が丹念な調査をしています。それによると、平本家の菩提寺宗園寺(そうえんじ・法華宗)の墓地に、金津を向いて建てられたと云います。福井市足羽山下に在った宗園寺は、戦後に同じ法華宗の教円寺と併合し、その教円寺も無住職になり、墓地は戦災震災の被害を受けて整理され、足羽山西墓地に移されています。そこには残念ながら、良充の墓も墓碑もありません。

ただ幸いなことに、雨森増質の直筆の碑文が、平本家に代々受け継がれて来ました。その文書が軸装されて、第七代当主の平本孝氏から北潟公民館に寄贈されました。この碑文から、平本良充の人となりを見ていきます。

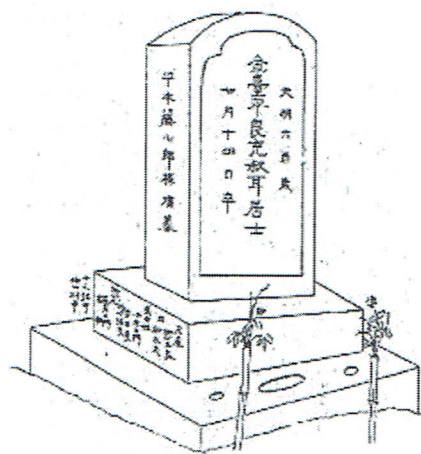
■平本良充の人物像

良充の人柄は、聡明で俊敏であり、世の中を良くしたいとの大志をいっていました。また、漢詩文や風雅の世界を好んで、いつも書物を手放しませんでした。そして、話が上手で、誰もが聞き入り、その場を和やかにしました。

さらに、金津奉行になると、何事においても優れた決断力を示して、百姓の便宜をはかり、身分の上下のわけへだてなく、平等に可愛がりました。それで、百姓たちは皆、感謝恩礼の気持ちを持ちました。それに、良充奉行は、喜怒哀楽の感情を顔色に出すことはなく、いつでも平静に対処していました。

それで、金津奉行から藩主の側用人に栄進し、金津を離れるときも、人々は良充を敬い慕っていました。没後に、北潟村ではみんなで相談して、顕彰碑を建てて、良充の素晴らしい功績を後世に伝えていこうとしています。

平本良充は金津奉行の在任中に、藩主からその統治能力が高く評価され、藤七郎の名を賜り、50石加増されて、350石から400石になっています。領地の人々から慕われ、藩主からも高い評価を受けた平本良充は、まさしく名奉行であったのです。



前回では、雨森増質が記した平本良充の墓碑銘の内容の概略を書きました。今回は、浅野文驥が北潟の村人の求めに応じて記した「恩爺の碑」の碑文の内容を現代語に訳して紹介し、昭和に入ってから平本祭を記すことにします。

■ 恩爺の碑

天明6年(1786)7月14日、平本良充が64歳で亡くなりました。それを知った北潟村では、恩爺の碑を建立して末永く謝恩の念を子孫に伝えていこうと、子息の良郷に願い出て、碑文を金津ゆかりの福井藩の医師浅野文驥に記してもらいました。『越前人物誌』の「嵩山文稿」によって、その全文を現代語に訳して紹介します。

《北潟の者が平本良充をお祀りしたいと云うことだ。良充はかつて金津奉行であったとき、北潟は豊かでなく、村人の10人に7~8人が離散するほど困窮していた。そこで、良充は非公式に北潟を訪れて、その実情を見て訴えを聞き、助言を与えて、慰め励ました。すると1年ほどで村が平穏になった。その後、村人が平本奉行に会って徳政を感謝し、平本奉行を恩爺と呼んだという。その後、良充が金津奉行から福井藩の側用人に栄進し、福井に住むようになった。するとまた、村人が福井まで出向いて(相談し助言を受けて)感謝すること16~7年の間、変わらず続いた。良充が亡くなると弔問に訪れ、庄屋などが良郷に独自に諡(おくりな・法名)を付けさせてほしいと願いでた。数日後には、どこか適地を選び、恩爺の碑を建立して、神主を招き、神として祭祀し、わが子孫に良充の大恩を忘れないようにしたいと願いでた。良郷は(快く)許可した。

私(浅野文驥)はあなた(良充)と親しく語り合うようになって13年になり、慈愛と真心をもって(領民に)接し、性格も温厚であり、まるで中国古代の名君召公のような人徳の為政者であることをよく知っている。今(亡くなると)、北潟の者が良充を神として祭祀したいと聞く。それで、召公の善政に感謝した召南の領民が、「召公が休息した所に生えていた山梨の木を大切に、その人徳をしのんだ」という話を思い浮かべた。あなたの善政に感謝し敬愛する(北潟の村人の)気持ちはよく理解できる。善政を行う者には、それにふさわしい民衆が育成されるというが、北潟の村人も徳のある人たちであろうと推察する。丙午(ひのえうま・天明6年)冬10月 医官浅野文驥撰》

■ 平本祭

安楽寺の墓地には、平本良充と子息良郷の墓が2基並んで、金津に向かって建っています。昭和10年3月26日に、第6代当主平本柏堂氏を招き、150回忌の法要を営み、昭和58年3月15日に、東西区長を発起人として、200回忌の法要が安楽寺で執り行われています。

